一N.

鮭　山百合

蔭深き杉の下川青淵に千ぢの蝦夷
栗の思ひをするところ
北限夷のイヌ小屋に榾焚きて生けらく
鮭を焼きて食はかりを
秋の空白鳥の雲このひろ川に五尺の鮭の
ひれふりすもよ
秋の空巳に初冬につかりつるの谷にう
ちの里に流乗の赤しより果限夷の生
けりく鮭を杯無に食ふ

草りやの桂にかけり乾鮭に人の魂ゑぶ
樹蔭日和

どうも家一面の苔多くて うるくり赤
おせん　ふるくふ剖の新芽
三月一日　久保田彫元

奈良林

一二、

山百合

鮭

蔭深き木の下川青淵は千ぢれ蝦夷
菓の児をするところ
北蝦夷のアイヌがい屋に榾焚きて生けらく
鮭を焼きて今日はわしを
秋の空日高の聖べのひろ川に五尺の鮭の
ひれふうすもよ
「秋の空」は秋初につかひつつ明日にの
あず里に流車のあしより奥蝦夷の生
けらく鮭を秋毎に食ふ
草りやの柱にかけし乾鮭に冬の蝿とぶ
機織日和

どうも家あるのが多くて うまくいかぬ
おせん よりくらかれて死んだ
ミヲ一、 ハ月廿九

島木赤彦歌稿入書箇(長塚節宛)

特別
文庫14
A117

島木赤彦書簡　長塚節宛